

国際基督教大学人文科学科 森本あんり教授に聞く！

【検証！】

『ダ・ヴィンチ・コード』の背景

——フィクションとノンフィクション

1 秘密結社とその時代的・社会的背景

Q この映画には、「シオン修道会」をはじめとして、いくつかの「秘密結社」組織が登場します。これらは、いつのようにつくられたどのような経緯で世に知られるようになったのでしょうか。

A 実は、「シオン修道会」は、二〇世紀に歴史家たちが論じるようになってはじめて注目された存在で、現在も実在したかどうか定かではありません。中世の歴史文書にときどきその名が言及されているようですが、それも非常に曖昧です。研究者によつては、その歴史全体が現代の誇大妄想家による創作だとする人もあります。一方、「オプステイ」は二〇世紀にできて今も実在するカトリック団体です。一九八三年には正式に教皇の認可も受けています。基本的には家庭

や職場で普通の生活を送る在俗信徒の組織なので、専従者もいますが、映画に登場するシラスのような「修道僧」は、実際にはいません。他の多くのキリスト教団体と同じように、この団体にも逸脱や背信があるでしょう。しかし、性格上は「秘密結社」ではありません。

Q フランス国立図書館に存在するとされる「シオン修道会」に関する「秘密文書」は、どのように発表されたのでしょうか。またそれは学術的に「信用に耐える」文献と判断されているのでしょうか。

A この「秘密文書」は、一九八二年にイギリスの歴史家たちが発表した研究書によって知られるようになりました。「シオン修道会」に関する議論は、現

在のところほとんどがこの文書によるもので、原著者も認めている通り、マケダラのマリアとイエスの関係やその子孫の存在といった映画のあらすじも、この研究書に全面的に依存しています。

一般に、歴史研究の基本は一次資料にあたることですが、たとえ現物を調べて長年の研究をした上でも、確実に言えることはごく少ないものです。断片的な資料のつきはぎならまだしも、遠く離れた孤島のいくつかを憶測の糸で繋ぐような作業では、とても学問的とは言えないでしょう。

ただ、そういう一般論だけでは本誌読者に申し訳ないので、ここではあえて大雑把で無責任な私見を付け加えておきます。この文書には、件の修道会の八百年にわたる歴代総長名がずらりと並べられているそうです。このように完璧な一覧の存在は、歴史家にはかえって疑念をもたせます。ダ・ヴィンチやニュートンという「大物」の名が含まれていることも、「ハクづけ」の疑いを増します。歴史は、そもそもそ

もりもと・あんり 1956年神奈川県生まれ。国際基督教大学、東京神学大学院、プリンストン神学大学院博士課程を修了 (ph.D.)。組織神学専攻。大学で神学・宗教学を教える傍ら、11年に亘り国際基督教大学教会の牧師を務める。近著には『現代に語りかけるキリスト教』(日本基督教団出版局)、『アジア神学講義』(創文社)、『アメリカ・キリスト教史』(新教出版社) などがある。

んなにお誂え向きの「秘密」資料を残してはくれないものです。

Q 世の中には「フリーメイソン」などの秘密結社が存在しますが、知識に乏しい私には、その成り立ちも謎だらけです。彼らが自らの団体を「秘密」としてきたのはなぜでしょうか。団結を高めるためののでしょうか。もしくは他宗派からの弾圧を恐れたためでしょうか。また、比較的宗教の自由が認められる現代にあっても、なお「秘密結社」として存続する意味はあるのでしょうか。

A 厳密に言うと、この問いに答えることのできる人は誰もいません。自分で秘密結社に属していない人は、その答えを知らないでしょうし、属している人は、秘密なのだから答えてはくれないでし

よう。誰も自分からそれを公言しないから「秘密」結社なのです。

ではなぜ秘密結社が存在するのか。いや存在すると知られるのか。それは、実はさほど「秘密」ではないからです。たとえば、ご指摘の「フリーメイソン」は今でも拡散したかたちで存在しますが、彼らは自分たちを「秘密結社」ではなく「非公開団体」と呼んでいます。ウェブサイトも公開され、入会条件などが明記されています。彼らの「秘密」性は、現存の他のメンバーの名前を明らかにしてはならない、という程度のことです。「個人情報保護法」の時代にはむしろ当然の配慮かもしれません。

秘密性が団結を高める、ということはおそらく確かです。子どもの遊びがそうであるよ

うに、同じことなら何かしら秘密めかした方が面白いものです。しかし、それ以外の推測は、たぶんのはずれです。秘密結社には、概して地位の高い人や経済的な余裕のある人が属しますので、弾圧を恐

れる必要はなかったと思います。そういう人々の友愛団体ですから、大衆に知られることなく仲間利便をはかたりするために、秘密性は役立つたかもしれません。

なお、秘密結社とりわけ「宗教的」なわけではありません。何らかの宗教を信じていることを入会条件にしている団体もありますが、それは宗教をもつことが「紳士であること」の一部と見なされてきたからです。

2 聖杯伝説

——「では伝説はほんとうだったのか」導師はシラスに言った。「修道会のキー・ストーンは『薔薇の印の下にある』と言われている」——

『ダ・ヴィンチコード』 上巻149頁

を加えようとするのでしょうか。

Q 「インディ・ジョーンズ／最後の聖戦」など聖杯伝説にまつわる映画を度々観る機会がありながら、私はそもそも「なぜ聖杯を追い求めるのか」という人々の心理について、考えたことがありませんでした。「聖杯伝説」が日本では身近ではないために、その定義を巡りこころも大きな議論が起こされる理由がびんとこない、というのが正直なところでは右記の参照のように「伝説」が浸透し、根づいているものなのでしょうか。人々はなぜ、「聖杯」を言葉通りの「カップ」とせず、意味

A 聖杯や聖骸布や聖骨といった「聖遺物」には、おそらく病氣治療などの宗教的なオーラが宿っていると考えられるためでしょう。仏教にも「仏舍利」がありますから、キリスト教に限った話ではありません。「聖杯伝説」は、実は一二世紀になつてはじめて書かれたもので、それ以前の千年ほどは関心をもたれなかったようです。したがって、この伝説が西洋の人々に「根づいている」というのは、もっ



ばら中世以降の騎士道文学の一部として、という意味に限定されます。

聖杯を女性やその血脈のことだとする転写がどれほど広まっているのかは、わたしも知りません。連想はあり得ると思いますが、しかし、聖杯伝説は、キリスト教伝統の内部に位置づけられたことは一度もありません。かりにイエスが今この伝説を知ったなら、さぞ驚くことでしょう。聖杯に特殊な力が宿っているという考え方も、キリスト教よりはむしろその周縁の

オカルトや魔術に特徴的な考え方で。ちなみに、お釈迦様も、ご自分の遺骨ではなく教えこそが大事にされることを願っていましたから、仏舍利をご覧になって

もあまり喜ばれないのではないのでしょうか。ただ、それでも人々の想像力はそれにかたむかいます。まっわる文学を生み出してゆきます。つまり、『ハリー・ポッター』のような物語を愉しむ人は、西洋にも東洋にも、昔も今もいる、ということです。

3 宗教学における 仮説と通説の位置付け

「テンブル騎士団は秘密文書を取りもどすためにシオン修道会によって設立されたというの？ 聖地を守るために組織されたものだと思ってたけど」——
『ダウインチコード』 上巻223頁

Q 「テンブル騎士団」は、『ダウインチコード』のなかで物語の重要なキーワードとして登場するのですが、これはどのような組織なのでしょうか。

A 「テンブル騎士団」は、十字軍時代の歴史に記憶されている実在の団体です。ただ、彼らのエルサレムでの活動や発見などの詳細については、定かなことは何も言えません。現在もその名を借りる団体が各地に見られますが、中世のそれと系譜的な連続性をもっているわけはありません。

Q 右の参照のように、原作の中で著者ダン・ブラウンが、登場人物に自

A 宗教学は、何か実在したかどうかよりも、その実在を信じた人々

説を断定的に語らせる場面がいくつか見られます。宗教に明るくない者には、それが現代の世に認められた「通説」であるのか、「仮説」であるのか、もしくは複数ある「仮説」の一つであるのか、その見極めすら難しいところがあります。今でも実態が謎とされている組織や出来事(例えばテンブル騎士団など)については、宗教学の講義や教科書で取り上げる際、どのように位置付け解説されているのでしょうか。確証がなく、「仮説」の域を出ないうちは、教科書には通常、記述されないものなのでしょうか。

が何を考えたかを扱う学問ですので、「テンブル騎士団」の実在如何が宗教学の教科書に載ることは、今後もないと思います。しかし逆に、たとえ実在しないものであっても、そこに人々の宗教的表現が認められる限り、考察の対象になることは十分にあり得ます。

ご質問は、おそらく歴史家が答えるべきものだと思いますが、歴史学の立場からしても、こうした「仮説」と「通説」の境目はごく曖昧です。もう少しはっきり言うると、「歴史的事実」というものは、実はどこにも存在しないのです。この世界に起こるすべてのことは、記録と記憶によって後の人々に伝えられるわけですが、それを百パーセントの正しさと確認する手段は存在しないからです。歴史とは、生の事実ではなく、あくまでも人々の心を通して受け止められた事実です。その限り、すべての歴史的事実は「仮説」であるとすら言えます。



4 福音書 その取捨選択

Q 新約聖書を編纂するにあたり、福音書の取捨選択はどのように行われたのでしょうか。『ダ・ヴィンチコード』の中(下巻16頁)で、「ナグ・ハマディ文書」や「死海文書」というものがさらりと触れられています。これらは、聖書に編纂されなかった福音書と考えているのでしょうか。どのような人物によって書かれ、数ある福音書の中では、どのような位置付けなのでしょうか。

A つい先日にも、「ユダによる福音書」が真正な文書であることが確認された、という報道がありました。この場合の「真正な」という言葉の意味は、後代の偽作ではなく紀元三〇〇年頃の文書だ、という意味です。当然のことながら、それは一世紀に生きたイエスの弟子ユダが書いたものではありません。

ご質問の「死海文書」と「ナグ・ハマディ文書」も、そういう意味で「真正な」文書ですが、その内容の解釈は別の問題です。特に後者は、二〜三世紀のグノーシス主義者がまとめた文書で、現在の新約聖書にならざるまじな「福音書」を含んでいることが知られています。しかし、それらは新約聖書の福音書と異なり、イエスの伝記というよりも語録や抜粋にすぎません。

現在の四つの福音書の「正典」的な地位は、キリスト教の国教化以前にすでに確定していました。その決定過程にも、政治力学は働いたことでしょう。しかしこの場合、「勝者によって書かれた歴史」とは言えないと思います。実は、現在の四福音書に特徴的なのは、「勝利」ではなく「受難」の物語なのです。迫害を受けていた当時のキリスト教徒にとって、勝利者ではなく苦しんで死ぬイエスの姿こそが救済者の証だったのででしょう。先にまずキリスト教が出来る上って、それが聖書を取捨選択したので

はなく、聖書の正典化プロセスの中で、教会も成立していった、ということですが、

Q 「ピリポによる福音書」は、イエスの配偶者はマグダラのマリアであったとしていたようですが、そもそもこのように「イエスが結婚していた」とする福音書の意図は何だったのでしょうか。イエスを既婚者とするにより、教義やその布教に影響があったのでしょうか。

A 「ピリポによる福音書」も、前述の「ナグ・ハマディ文書」に含まれている一書です。形成期にあったキリスト教は、神との媒介構造を男性中心的なヒエラルキーによって組織化してゆきましたが、グノーシスは組織というより思想ですので、こうした媒介を必要としません。だから女性の力が前面に出やすいのです。

イエスが結婚していたかどうかは、どの資料によっても確定的なことは言えません。それが教義の上で重要だとも考えられてはいなかったようです。しかし、イエスの妻がマグダラのマリアで、二人の間に子どもがいたなどということは、ありそうにないと思います。諸資料の関心がそこに向けられていないからです。

『ダ・ヴィンチコード』の成功の一因は、フィクションとノンフィクションとを上手につなげた点にあるでしょう。原著者は、娯楽作品という性格づけを残しつつも、なおその基本的なストーリーを自分でも信じている、と語っています。だから学者たちにあるこれと間違いを指摘されることに

なるわけですが。わたしも、原著者に限らず多くの人が誤解していることについて、自分の研究分野から少し大まかに二点を指摘しておきたいと思っています。

一つは、グノーシス思想が一見女性を尊重するかに見えて、実は性に関してきわめて厳格かつ否定的だ、ということですが。初期のキリスト教は、これと多くの共通項をもちつつも、あくまでも禁欲主義を斥けて人間の自然な性のあり方を肯定しました。その区別によって、キリスト教はようやく自己確立を遂げたのです。もしここで現在とは違う選択がなされていたら、キリスト教はその後グノーシス主義と同じ運命を辿って自然消滅していたと思います。

もう一つは、「教義」の決定過程についてです。宗教の教義というものは、誰か偉い人が上からの権力で唐突に決めてしまえるものではありません。それは多くの場合、人々がすでに実際に信じている内容に形式を与えることで成立するのです。たとえば、カトリック教会に特徴的な聖母マリアの教義は、人々の長年の篤い信仰心に教会が動かされた末、ごく最近になってできたものです。マグダラのマリアが長年「罪の女」と同一視されていたのも、むしろ以前は罪の女で「あつた」けれども悔悛して「聖人」になった、ということを強調するためでした。そこにも、聖人ならざる多くの普通人の切なる願いが込められています。

いずれにせよ、『ダ・ヴィンチコード』は、こういう小難しい議論を脇へ置いて、素晴らしい娯楽作品として楽しむのが一番です。

